

動物の飼育経験ならびに飼育期間と パーソナリティとの関連

谷口弘一

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

問題と目的

動物の飼育経験がパーソナリティ形成に影響を与えることは、これまで多くの先行研究によって示されてきた。例えば、大学生を対象として、動物の飼育経験ならびに好意度とパーソナリティとの関連を検討した塗師 (1999) によると、動物の飼育経験がありかつ動物好きの男性では外向性が高く劣等感と抑うつが低いこと、同様の女性では共感性が高いことがそれぞれ明らかとなっている。また、大学生における養護性 (相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能) の規定要因を検討した榎澤他 (2009) では、ペット飼育体験がありかつペットへの養護体験が高い男性は養護性が高いことが見出されている。本研究では、動物の飼育経験の有無に加えて、動物の飼育期間がパーソナリティ形成に与える影響について検討する。飼育期間が長くなるほど、飼育動物との接触時間も多くなるため、パーソナリティに与える影響がより強くなると予想される。

方法

調査参加者と手続き 大学生 191 名 (男性 105 名, 女性 86 名) が調査に参加した。平均年齢は 21.00 歳 ($SD = 1.62$) であった。調査は、スマートフォンやパソコンなどを利用して、ウェブ上で実施された。調査の実施に先立ち、参加は任意であり、いつでも中断可能であること、結果は集団で集計されるため、回答内容や個人情報とは特定されないことなどが口頭または文章で説明された。参加者 191 名のうち 65 名は、同意書に署名をした上で、各質問に回答した。残りの 126 名は、ウェブ上で「同意する」ボタンをチェックした上で、調査に参加した。

調査内容 調査には、年齢、性別といった人口統計学的変数を測定する項目に加え、以下の尺度が含まれていた。①動物の飼育経験と飼育期間: 過去の動物飼育経験について、現在も飼育している場合を含め、1 項目で質問した。回答は「ある」または「ない」の 2 件法であった。また、「ある」

と回答した参加者のみ、飼育期間についても質問した。複数期間飼育したことのある参加者に関しては、その飼育期間の合計を回答するよう求めた。②パーソナリティ: 小塩他 (2012) によって作成された日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) を使用した。本尺度は、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の 5 つの下位尺度をもつ。回答は、「まったく違うと思う (1 点)」から「強くそう思う (7 点)」までの 7 件法であった。得点が高いほど、各パーソナリティ特性が高いことを示す。

結果

参加者を動物飼育経験あり群と動物飼育経験なし群の 2 群に分類し、5 つのパーソナリティに関して、独立サンプルの t 検定を行った。その結果、いずれのパーソナリティにおいても有意差は見られなかった (外向性: $t(189) = 0.452, ns$; 協調性: $t(189) = 0.829, ns$; 勤勉性: $t(189) = -0.357, ns$; 神経症傾向: $t(189) = -1.239, ns$; 開放性: $t(189) = 1.646, ns$)。

続いて、飼育期間の長さとの関連を検討するために、まず、動物飼育経験ありの参加者を飼育期間 (範囲 1 ヶ月~239 ヶ月) の中央値 (61 ヶ月) で短期群と長期群の 2 群に分類した。次に、動物飼育経験なし群を含めた 3 群間で、5 つのパーソナリティについて、1 要因の分散分析を行った。その結果、いずれのパーソナリティにおいても有意差は見られなかった (外向性: $F(2,188) = 0.140, ns$; 協調性: $F(2,188) = 0.389, ns$; 勤勉性: $F(2,188) = 0.603, ns$; 神経症傾向: $F(2,188) = 0.826, ns$; 開放性: $F(2,188) = 2.116, ns$)。

考察

動物の飼育経験の有無ならびに飼育期間の長さとの間には有意な関連が認められなかった。金 (2006) や森下・小林 (2014) が指摘しているとおおり、単に動物の飼育経験の有無や飼育期間の長さだけではなく、飼育動物に対する態度や関与の程度がパーソナリティに対してより強い影響を及ぼすと考えられる。